

第5回福祉用具専門相談員研究大会（記虎孝年大会長）が19日、大阪府豊中市の千里ライフサイエンスセンターで開催された。今年度のテーマは「未来を支える福祉用具サービスの可能性」。多職種連携や福祉用具の安全利用など6テーマ48演題での口述発表やシンポジウムなどが行われ、現地・オンライン合わせて1300人以上が参加した。

特別講演「福祉用具の利用支援、評価システムの構築」では、兵庫県立大学大学院社会科学研究所

福祉用具は利用者の問診表

現場の知恵のデータベース化を提起

福祉用具専門相談員研究大会

講演する筒井教授



科の筒井孝子教授が登壇。これからの福祉用具の役割として、介護サービスの受ける利用者の問診票となることを挙げ、利用者の情報をデータベース化し、現場の知恵を型化することを提起した。具体的には、▽見守

り機器▽車いす▽排泄支援機器などの機器から、利用状況や事故発生状況をまとめ、医療・介護・研究などオープンデータとして横断的に使えるように都道府県が中心となつてまとめるべきとした。

部長は、福祉用具の安全性と効果を評価し、利用者の生活の質の向上に貢献するための実践的な知見を提供する発表が多くあったと総括。具体例として、▽電動車いすの導入による外出活動の拡大▽転倒予防スケールを用いた住環境整備▽スライ

シンポジウムでは、小野木孝二副大会長と、口述発表で各テーマの座長を務めた6人が登壇し、口述発表の総括が行われた。「科学的根拠に基づく未来に向けた福祉用具の取組」の座長を務めた兵庫県社会福祉事業団の長倉寿子教育・連携担当

また、福祉用具専門相談員に今後求められる役割として、メンテナンス能力や種類の知識だけでなく、多職種協働をさらに進めるため介護の実務知識も必要と強調した。